
ホームレス達のいるところっ!!

カルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホームレス達のいるところっ！！

【Nコード】

N 6 2 4 1 M

【作者名】

カルタ

【あらすじ】

関東のとある森の中、今日も何かが起きている！？

ニートな主人公の人生は、個性的で愉快的なホームレス達との出会いによって変わっていく。

笑いあり、笑いあり、最後に少しの涙ありの、ホームレス達の日常をご堪能あれ！！

第一章（1） 遭遇 襲撃（前書き）

初投稿作品です。

上手く書けてるか心配ですが、どうぞ宜しくお願いします。

第一章（１） 遭遇 襲撃

月曜日の朝。

他の学生は、休日の名残惜しさを感じつつ学校に行っている時間である。

春の陽気が暖かい日のそんな時間。駅からは遠く、周りには緑が目立つボロアパートの一室で……。

俺、木々乃遊ききのゆうは新発売のライトノベルを読み終えた。もちろん学校には行っていない。そして、こんなニートのような生活をしているも（事実ニートですが…）注意する親はもうこの世にいない。

ラノベを読み終え、やる事が無くなった。やること無いなら学校に行け、という声が聞こえてきそうだが気にしない。

何かないかと探していると、目の前に転がっている預金通帳に気がつく。ある事情で今年に入ってからかなり散財したため、預金残額が気になった。目の前の通帳を手に取り、開いて中を見ようとしたところで、

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。

暇じゃなければ居留守を使っているところだが、ちょうど暇だった俺は気だるさを感じながらもドアを開けるために立ち上がる。

ドアを開けるとそこには大家さんが立っている。不気味なほどの笑顔で。普段は無表情なんだが…。機嫌がいいのだろうか？

「金出せ」

…何の事が分からない。いきなり家に来てそれはないだろう。とりあえず首を傾げてみる。

「金出せ」

みぞおちへのパンチのオマケ付きだった。

その衝撃で思い出したは：家賃を今年に入ってから、ずっと納入し忘れていたという事だった。

……ヤバい。思い出した途端に笑顔が怖く感じる。しかもこの人、昔ヤンキーだったと聞いたことがあるような…。

でっ、でもしょうがないんだよ！二期連続で話題作が放送されたんだ！AnOne b O a t sとか超〇磁砲とか！グッズに何万円もつぎ込むのは当たり前だ！

おっと、今は大家さんに言っても許してもらえなさそうな言い訳なんか考えている場合じゃない。

早く家賃を払わなきゃ、この家から追い出さ「早く出せ。次は手加減しねえからな。」俺が殺される。目は、本気だ。笑ったままだけど…。

財布の中身は、先日アニ〇イトで使い果たした。手に持っている通帳を確認する。

………絶望したああああ！預金残額が0だという現実に絶望したああああ！！

金は無い。あとは死刑執行を待つのみなんだが、さてどうしよう？

1：交渉…する余地があるとは思えない。

2：逃げ…られないだろう。

3：土下座でお願い…よし、これでいこう。プライド、何それ、美味しいの？

「あと一カ月…」

「無理。今出せ。」

最後まで言わせてくれなかった。だが、ここで諦める俺ではない！

「しっかり稼ぎ…」

「黙れ。次、口開いたら裂くぞ。」

発言権すら奪われた。…裂くって人に使う言葉だっけ？

…という訳で三時間後

ゲーム機やパソコン、家具などを没収され（なぜかラノベは無事だった）、乱暴に家を追い出された俺は、とりあえず近所の公園に来ていた。

俺、おわた…（泣）

畜生！俺からゲーム・パソコン等を取り上げたらラノベ以外何が残るんだよ！というか実際ラノベ以外残んなかったよ！

……ラノベが残っただけマシか？ってそういう問題じゃねえ！

それより飯はどうしよう。もちろん買う事は出来ない。

金が無い＋インドア野郎＋野宿＝死。そんな公式が頭に浮かぶ。

十六年。長いようで短い人生だった…。父さん、母さん。生んでくれてありがとう！今、逢いに行きま（以下略）

こうして錯乱すること二十分

ようやく落ち着いた俺は、これからどうするかを考えながら公園のベンチに座っていた。
すると…

「ねえママ、なんであのお兄ちゃんは学校行かないの？」

「見ちゃダメー！」

グサツ【きぎのに102のダメージ！】

いきなり大ダメージをくらった。実際に言われるとかなりキツい言葉だ。

突然心に傷を負った俺の前に…制服姿の女の子が現れた。なぜか公園の周りの森の中から。【脳内ではポケ○ンのBGMが流れている】

街中の公園にしては、やけにエンカウント率が高い。

女の子をよく見てみる。黒髪ロングヘアー、俺と同年くらい。

そして…可愛い！

でも、なぜか俺と同じ様な残念な子のおいがする。

「あなた、今日は平日よ。学校は？」

「えっ」

笑顔で唐突に聞かれ、言葉に詰まる。そして、その笑顔が大家さんとかぶる。

「学校は？」

いつ、言いくい！仕方ない、ここは嘘でも「教えて？」つかないで正直に言おう。

「サボリ…ました…」

どうしても歯切れが悪くなる。

「なんでここに居るの？家は？」

また言いくい事をつ！今度こそ嘘を「教えて？」つかずに堂々と言おう。

「たった今、無くなりました！」

…自信満々に言った自分が恥ずかしい。何もここまで強気で言う事もなかっただろう、と自分でも思う。

「そう」

何のツツコミもなく、そいつは少し黙り、

「ぐほあ！！」

拳を構えて右ストレート。笑顔でみぞおちに叩き込んだ。【13

2のダメージ】

今日はなぜか、みぞおちをよく狙われる日だ。

「いつ、いきなり何をするんだ！」

「サボりの現行犯で、拘束します！！」

「お前もここに居るってことはサボりだろ！」

「そんな些細なことは気にするな。」

「些細じゃねえよ！気にするよ！」

「うるさいな。私はただ…」

「？」

「学校の外をブラブラしていただけだ！」

「それをサボりっていうんだよっ！！」

久しぶりに全力でツツコミを入れる。

「……ちっちゃいことは、気にするな」

「ゆっ〇い!?!」

やりとりが一段落した途端、やつは一瞬で俺の背後に回り込んだ。振り返ろうとすると、後頭部に衝撃がはしり、意識が遠のいた。【きぎのは目の前が真っ暗になった】

あの笑顔は…一生…忘れないだろう…

第一章（1） 遭遇 襲撃（後書き）

いかがでしたか？

面白いと感じてくださったなら嬉しいです！

第一章(2) 遠い日の記憶1(前書き)

更新が不定期ですが、よろしく願います！
では、第2話の始まりです！
今回は地の文ばかりですが…

第一章（２） 遠い日の記憶 1

後頭部にかすかな痛みを感じながら、意識を失った俺は夢を見た。それはとても懐かしく、忘れることのできない悲しい記憶。

…小学三年生の夏。梅雨真っ盛りのその日は、視界が霞むほどのどしゃ降りだった。

今となつてはニートな俺だが、その頃は友達も多かったし、外でもよく遊んだ。普通の元気な男の子だった。

俺の隣の席には、一年生の頃から同じクラスの女の子がいた。名前は…何だったかな？

もう忘れてしまった。ふつ、昔の女の名前なんて…調子乗ってスンマセン。

…ともかく、そんなテンションが下がるような天気の日、俺はその女の子と一緒に帰っていた。傘を忘れてしまって、入れてもらっていたのだ。もちろん、わざと忘れたわけではない。…多分。

俺たちは他愛もない話をしながら歩いていた。何の変哲もない、ただただ平和で、幸せな日常を過ごしていた。

通学路を半分くらい歩いた所にある橋の上に両親が立っていた。傘を届けに来てくれたようだ。

もう少し女の子と話していたかったので、傘を受け取って、両親には先に帰ってもらった。

行かせてしまった……

親が横断歩道に差し掛かる。信号は青。右からは黒い車。スピードは…落ちない。

もう一度言うがこの日の天気は、視界が霞むほどの雨。音も雨の音しか聞こえない。

親たちは気付かない。話しながら歩いている。

気づけ！気づけ！

俺はそう念じながら、親を止めるために必死に叫び、全力で走った。雨が、俺と親を隔てる壁のように激しく打ち付ける。

……ああ、届かない。伸ばした手も、絞り出した声も。

目の前では、時がゆっくりと流れていく。

響き渡るにぶい音。後ろから聞こえる女の子の叫び声。走り去る車。

その中で、俺だけが……ただ呆然と立ち尽くしていた。

気が付くと病院の中だった。気絶していたようだ。聞いた話だと、親は即死だったらしい。

一緒に帰っていた女の子は、かなりのショックを受けていたと聞いた。心の中で、謝り続けた。

遺産はすべて俺のものになった。何不自由ない暮らし。そこには、今までのような温もりはなかった。親が居て、友達が居る。そんな日常はどこかに行ってしまった。

学校には行かなかった。

目の前で起きた事故を防げなかったこと、友達にショックを与えてしまったことに対する責任感。それは小学生には大きすぎる重圧だった。耐えるので精一杯だった。

……何もせずに五年がたった

その頃には、テレビを見て笑うくらいの余裕ができていた。いまだ親戚以外との交流はない。

その日は遅くまで起きていた。24時〇テレビを見るために。

………今、「お前もう大丈夫だろ！」という声が聞こえた気がする

る。しかし俺にはまだ責……いや、本当だつて。本当にまだ辛……あ、もうわかったよ！正直に言えばいいんだろっ！80%情性だよ！でもさ、不登校つて一定以上の時間がたつと恥ずかしくて人前に出ていけねえんだよ！

それはさておき、話を戻そう。その日は遅くまで起きていた。だいたい一時半頃、CMに入ったため、チャンネルを変えた。アニメのOPが流れていた。

好奇心に駆られて見始めた。内容は、ほのぼのとした学園もの。

……涙があふれた。地元の中学校にも、こんなに楽しい日常があるのだろうか？学校に行ってみようかと思った。しかし、羞恥心が勝り、高校生になった今でも学校には行っていない。

俺は今、アニメやラノベを通じて、失ってしまった学校生活を味わっている。そしてこ

れからも……

綺麗な茜色の光が俺を包み込んでいく。

第一章(2) 遠い日の記憶1(後書き)

地の文ばかりの遊くんの回想でした。ちょっと重かったですね？
他のキャラ達も、やっと次の回で出てきます！
お楽しみに。

第一章(3) 出会い 始まり

西日がまぶしい夕方。

俺は森の中(多分近所のだ)で意識を取り戻した。何か夢を見た気がするが……なんだったかな？

まあいいや。とりあえず今までの状況を整理しよう。

大家さんにみぞおちを殴られる？家を追い出される？女の子にみぞおちを殴られる？女の子に後頭部を殴られる

……嫌だな。泣いてないよ？

目から流れる汗をぬぐう。

それにしても、この森にこんな開けたトコあったっけ？ざっと辺りを見渡してみる。そして俺が見たものは……

1・青テント

2・赤テント

3・虹テント

……なぜかテントしかない。しかも、

「虹テントなんてよく見つけたな!!」

思わず大声でツツコンでしまうほど鮮やかな七色。ホームセンタ―でも滅多にお目にかかれないだろう。

その声が聞こえたのか、テントから三人の人が出てきた。ちっこい女の子と、おどおどした女の子と、ボーッとした男の子だ。

「おー、起きたか!」

「思ったより早う起きたな!」

「コクリッ」

三者三様の反応。悪いやつらではなさそうだし、これだけは聞いておかなければ。

「俺を殴りやがった女の子を知らないか？」

「ん」

間髪入れずにボーッとした男の子と小さな女の子が、もう一人の

女の子を指差した。それにしても仲間売りの早えな！！

よし、あれだけ強かったんだ。手加減は「ごっ、ごめんなさい！」
…許す！上目使いはズルいと思う。

うーん。こんな子が人を殴るなんて考えられない。雰囲気は違う
けど外見はこの子だしなあ…

なんて考えてると、

「いや、謝るんはウチの方や。『正義感の強い風紀委員』の設定にしたテルを野放しにしたんはウチやし。」

「はい？設定？」

チビ娘が…

「今なんて言った（怒）？」

「なにも言つてません。」

こいつ…能力者か？

こほんっ。関西弁の子が訳のわからん事を言い出した。

混乱しかけたところで、目立たなかった男の子がフォローをいれてくれる。

「とりあえず自己紹介と、輝の説明しない？」

「せやな。それじゃああんたからな。」

ビシッと俺を指差す。

「俺から？まあいいけど…」

その場の流れで俺から自己紹介。

「俺の名前は木々乃遊。ヲタクでニートな高校一年生。親は昔死んで一人暮らし中だったんだけど、家はさつき無くなった。」

……自己紹介ってこんなに悲しいものだったっけ？

「「はははっ！普通だね」（笑）」

どこがだ！？

「ほな、次はウチやな。」

「その次は僕ねー。」

チビ…関西弁の女の子が自己紹介を始める。

「難波凜、16歳。関西弁で喋ってるけど、生まれも育ちも東京。」

家と親の事情はおんなじや！将来の夢はメイクアップアーティスト。よろしくな、ユウー！」

あんまり宜しくしたくないなあとか思っていると、次の自己紹介が始まった。

「久原仁、^{ひくはら ひと}17歳。家はなくて、家族は行方不明。夢は絵師です。よろしくねー」

……ツツコミ所が多すぎる。一瞬「あれ？俺って普通じゃね？」とか思ってしまった。

「こいつは？」

一番謎の女の子が残っている。

「きつ^{きたひかる}黄田輝、16……歳」

「はい、ようできたなー。」

「輝は照れ屋なんだー。素だとあんな感じ。メイクして着替えると、雰囲気に合わせて性格が変わるんだー。」

不思議過ぎるよっ！！

「仁がのんびり説明してる間にできたで〜。」

「さつきは本当にスイマセンでした。家や親の事情はみんなと同じで、夢は声優です。凜には音読みでテルと呼ばれています。」

ナチュラルメイクだけでこんなに変わるのか……。

よし、とりあえず整理しよう！

・メイクさん志望の小さなエセ関西人、凜

・のんびりしてて絵師志望、仁

・照れ屋で性格不安定の声優志望、輝

……………わああ、俺を含めて変人だらけ！！

変人度は、俺>仁>凜 輝 といったところか。

「「「今、失礼なこと考えてたでしょ？」」」

「滅相もございません。」

疑問形にするなら拳を固めないでほしい。

「まあええわ。本題に入る。家なし、親なしの状況はウチらと同

じゃ。」

「堂々と言えたもんじゃないけどな。」

「あれ？公園で言っていましたよね？」

「一般論だ。俺は気にしない。」

「……………」

あれ、なんか冷たい目で見られてる。何故だ……

「……………続けるで？」

落ち込みつつも耳を傾ける。

「そろそろ話題無くなつてきて暇やから、ここに住めへん？タダとは言えへん。テントと食糧は提供する。」

【凜のスカウ○アタック。32%】

「テントと飯の代償が駄弁るだけって、軽すぎて怪しいんだが……」

……

「大丈夫。活動中にテルに襲われるから、決して軽くない!!」

「一気に重くなった!!?しかも原因はお前だろ!!」

「テヘツ」

「キモいぞチビ。」

攻撃を予測してみぞおちをガード。そして、

「ぐはあ!」

顔面……だと!?!というか、交渉中に武力行使ですか？

「とにかく駄弁るだけや!」

【76%】

駄弁るだけなら俺でもできる。駄弁るだけなら……

「気を付けや、テル。」

「主犯はお前だ!!」

「あれ、仁まだおつたん？」

「……………（泣）」

こいつらと居るのは楽しい。一緒に居るのも……悪くないのかもな。

「わかった。これから宜しく!!」

【凜はユウのスカウトに成功した】

あの事故以来、初めて友達らしい友達^ができた。

第一章(3) 出会い 始まり(後書き)

投稿が遅くて本当にスイマセンでした。

ついに仲間たちが登場です!!次回から活動開始するので、読んでいただけたら幸いです。

第二章 (1) 始まり 日常？

その日は雲1つ無い晴れ。

まどろみから抜け出し目を開けると、一面の緑。支給されたテントの色だ。

昨日は本当に色々あった。家を追い出され、数回殴られ、変人3人と遭遇。滅多に無い3コンボである。

昨日の出来事を思い出し、涙目になっていると、

「おはよー。よく眠れた？」

青テントの住人。絵師志望の仁が入ってきた。

「はい。朝御飯だよー。凜が作ってくれた。」

目の前に米、豚汁が出される。

「材料はどうしたんだ？」

ふと浮かんだ疑問をぶつけてみる。

「野菜は近所のオバチャンがくれる。肉と魚は…」

言いづらそうだ。何故だろう？

「…『狩人』モードの輝が取ってくる。」

便利だなっ！でも輝が可哀想じゃね？一体、狩人モードってどんな格好させてんだよ！

気になって、朝御飯を食べ終えた俺は外に出る。目の前に居たのは…身の丈ほどのゴツツイ弓を持った赤テントの住人、輝がだった。

「モ ハンかー!!」

鼻歌を歌いながら肉を焼いている。ブルファ ゴか何かだろうか。

「おう、おはようさん。どや？一年前作ったウチの自信作は！」

自信満々に聞いてきたのは虹テントの住人、凜だ。

「凄いけど！そこのコスプレなんかとは比較出来ないほど凄いけど！」

「ありがとう！人として間違いだって言わなかったんはアンタだけや〜！」

…今更「けど」の後が言えねえ。

「今日は何するのー？」

仁の奴、いつから俺の横につ！

「うーん。ウチから新入りに教える事もう無いしな。」

「無いの！まだ何も教えてもらってないぞ！」

ビュンツ…カッ（木に刺さる音）

大声で叫んだ俺の顔を掠めて矢が飛んでいく。頬には赤い筋が1本。

「大声を出すな。…殺られるぞ！」

「仁、喋り方変わってね？まさかお前も…」

よく見ると傷あとらしきものが頬に1本…

「思い出させないで！かなり怖…」

ビュンツ カッ

2本になった。今日の 輝は昨日より危険度が倍増している。

「…凜早く戻せ！」

「アカン。今日は食料調達やからこのまま。ユウ、ウチらは山菜集めな。」

「注意事項は？」

「…輝^{テル}に会うな。」

……近所の森で命がけの山菜集め。敵はハンター。貴重な体験だ
（泣）

そして、10分後…

カゴ（中）を支給され、再集合。

「よーし。皆集まったな！では、解散！」

凜が勢いよく号令をかけた瞬間、

シュタタツ…ドサッ

輝は鶏肉を手に入れた！

今の輝は確実にハンターラ ク9だ。ラー ヤン位なら1人で狩れるだろう。

その時、俺と仁の気持ちは1つだった。

「仁」「遊」「行くぞ!」

輝がいるのと逆方向に走る俺達。流れる冷や汗もそのままに…
草むらに駆け込む。

…カサツ（草むらに入る音）

ビュンツ…カッ

今度は頭上を掠めた。

「…チツ」

狙う気は満々のようだ。

《ここからはグロテスクな描写がありますので会話と簡単な説明のみでお楽しみ下さい》

「仁、このキノコは？」

「それはアオキ コだよ。」

「何であるんだって危なあ!!」

【木々乃は オキノコを手に入れた】

「大声を出すな。」

「ああ、すまない。気を付ける。…これは？」

「それはっ、危ない!っ!と僕が危ない!!」

「お前は何がしたいんだ。ってカゴに刺さつとる!!カゴガード

!!」

「ナイスディフェンス。あとそのキノコは毒ング茸だよ。は

い 毒草。」

【木々乃は毒テン 茸を手に入れた】

「リアル 林!!カゴガード!」

【ベー キャンプに戻ります。報酬が10Z減りました。】

「ミスってる!!!」

【ベースキヤ プに（以下略）

そして開始から6時間後…

「今日の成果は？」

「カゴ一杯ずつの山菜と、矢が5本（カゴに刺さった本数）、
毒ン2個です!」

満身創痍、疲労困憊。右を見ながら凜に報告する俺と仁。視線の先には…

「鶏肉10個、ブル アンゴ1匹、その他の肉16個です。」

…死体の山。っていうかブルファン いるのかよ！

「精肉して貯蔵庫へ。終わったら着替える！」

「イエス、マム！」

テンション高えな！どこの軍隊だよ！

「ハンターギル だ！」

「読心術までレベルupしてる！？あと絶対違うよね！」

まだツッコむ体力があつたことが驚きだ…

輝は普段はオドオドしてるが、基本スペックがかなり高いようだ。まだピンピンしている。

…奴は、化け物か？

精根尽き果てた俺達はテントに戻る。

今日、仁と俺は友情を深め、また1つトラウマを増やしたのだった。

第二章 (1) 始まり 日常? (後書き)

どうも、カルタです。

今回は遊と愉快的な仲間達の活動初日です！

これからもハイテンションなホームレスライフをお送りしていきたいと思います。

それではまたっ！

第二章（２） 兄を探して……森の中

疲れ果てた仁はテントに入って、物思いにふけていた。

「ここに来てから…もう２年か…」

そう呟く彼の口調は、いつものノンビリした彼のものでは無かった。只今絶賛キャラ崩壊中です。

そんな仁を睡魔が襲う。意識は暗闇へと落ちて行く……

主婦の母に、サラリーマンの父、そして小説家でオタクの兄が１人。それが彼の家族だった。性格は皆せっかち。当時中学２年生だった仁も、今とは正反对でせっかちだった。

持ち前の仕事の早さと行動力で、学校でもリーダー的な存在だった。

１０月下旬。その日は夏が終わったとは思えないほど暑かった。

もうすぐ文化祭！いやっほおう！

皆のテンションは日に日に上がっていく。

準備期間なので帰宅するのが遅くなった。

今日は仁の誕生日。皆は家で待っていてくれるだろう。

無意識に小走りになり、笑みがこぼれる仁。すぐに家に着いた。

…いや、家だった建物に着いた。

仁が見たものは、明かりの無い家、ドアに貼られた差し押さえのテープ。

「なんだよ…。なんなんだよ！これは！」

状況がわからないまま、何か無いかと家の周りをくまなく調べた。郵便受けの中から封筒を見つけた。父からだった。

・仁へ

とりあえずそこを離れて隠れる。絶対に捕まるな。

後ろから怒鳴り声が聞こえてきた。

とりあえず従い、学校へと走る。西にある森に逃げ込み続きを読む。

・これを読んでいる頃、お前はさぞ驚いていることだろう。

すまない。時間が無い。簡単に説明をすると、詐欺に引っ掛かって多額の借金を負ってしまった。暴力団に追われている。皆でいると目立つからバラバラに逃げている。以上。

申し訳ないが頑張れ！

父より・

…『頑張れ！』じゃねえよ！これからどうしよう？

森の中を茫然とさまよう仁。

ふと視界が開ける。そこには……

「おっ、珍しいな。こんなとこに人が来るなんて。」

「コクッ」

同じ年位の女の子が2人いた。こんな所で何をしているんだ？

「ここは一般人が来るとことちゃう。はよ帰り。」

「家は…無い。今日…無くなった。」

見知らぬ人、しかも女の子に何を言ってるんだろう？

「…ハアア」

何故か溜め息をつかれた。失礼な！

「あんたもか…」

「あんた…も？」

「せや。うちら2人も家無いねん。」

「えっ…」

「名前は？」

「じつ仁。久原仁。」

「ウチは凜。こっちは輝。仁、ここに住めへんか？森で飯とって、駄弁って、楽しく！正直2人やと話題がのうなってきたし…」

「でも…」

迷っていた。この子達と話して安心したのは確かだ。でも、別れた家族はどうしよう？

その時、ずっと黙っていた輝が話しかけてきた。

「悩み事が、あるなら…話して…。力になる、から！」

「！？テルが、はつきり喋った！」

「珍しいの？」

「輝は極度の照れ屋で、滅多に喋らないのだ！」

……説明を聞いて感動した。さっきの事を言うのに、一体どれだけの勇気が必要だったのだろうか？

「わかった。一緒に暮らす。でも、悩みはもう少し落ち着いてからにさせてくれ。」

「「やった〜！」」

俺は、ラノベ作家の兄を探すため、絵師を目指すことにした。そして、もう少し落ち着こうと思った。父の二の舞にならないように……こういう誕生日も、悪くは無いな。

こうして、僕の新しい生活が始まった。

第二章 (2) 兄を探して……森の中(後書き)

またまた過去話です。

矛盾点が多い話でスイマセン。マジメな話を書くの苦手なんです。
アドバイスを頂けると幸いです。
以上カルタでした！

第二章 (3) 早起き 女装？

昨日の疲れを残したまま目が覚めた。まだ薄暗いから夜明け前だろう。

外に出ると……まさかの全員集合！？

「なんでこんな時間に起きてんの！？」

「うるさいっ！！近所迷惑だ！！」

「……スイマセン」

…輝に注意された。

「できたで。新設定『キレル十代』！！」

「近所迷惑を注意するとかどんだけ良識的なキレル十代なんだよ！…あと、もつとまともな設定作れ！」

「うるさいっつてんだろ！」

「凜、輝を戻して。輝に怒られるのはグサツとくる…」

もうすでにノックダウン寸前だ。ハハッ、膝が笑ってらあ。

「はいはい。わかったから立ち直りや。」

凜は手早く元に戻してくれた。

「で、なんでこんな時間に全員起きてんの？」

「新設定の開発ができたからや。お披露目してた。」

「俺も起こせよっ！」

「忘れてたんや。しゃーないやろ。」

「仁に負けた（泣）」

「その発言は失礼過ぎない？」

「「……ゴメン、遊」」

「ひどいよ！凜はともかく輝まで…」

仁が乙つたところで、1つ疑問が…

「凜って輝にしかメイクしないよね。なんで自分や仁にしないの？」

「なんで僕が出てくるの？」

「似合いそうだから。」

「せやな。特に理由無いし、仁とユウにもやってみよか。」

「なんで俺まで!?!」

「「似合いそうだから。」」

「…という訳で、輝以外はメイク開始!

「出来た〜! 鏡、オープン!」

「…鏡の中には、1人の女の子がいた。

「嘘だろ。これ、俺か?」

黒く短い髪はきれいに整えられ、目は…死んでない! メイクの力、
凄いぞ! 服は近所の高校の制服だ。

「女装中は女言葉で!」

とりあえず無視。従う気は無い。他の奴が気になる。

仁は…いない? 横には茶髪の女の子が…ってこいつ仁か!?! 白
いワンピースを着て…

「うう…恥ずかしいよー」

涙目で弱音をはいている。

「…似合い過ぎだ。

そして、凜は…

「「男装!?!」」

活発そうな男の子になっていた。小さいのは変わらない。

「で、メイクしたけど…何するの?」

「しただけや。」

「ふざけんな!」

「冗談やんか〜。自分で外見からどんな人が考えて、なりきった
状態で駄弁ってもらう。」

審判はテル。10点満点で採点してもらいまーす!」

「ペコリッ」

「嫌だよ! 恥ずかし…」

「優勝者は、今日の晩飯が焼き魚から、焼きブルファン 井にな
るで〜。」

「頑張ります！」

人生初のブルフンゴ、メツチャ食べてみたい。

まず10分のシンキングタイムが与えられた。

制服だし、普通に女の子でいいよな。

余った時間は女声の練習に費やした。

10分後：

「よつしゃー！ほな、15分のフリートーク始めるでー！」

「あんた素だよな！」

「遊子ちゃん。今のは減点対象ですよー。」

さりげなくチクられた。

「じゃあ自己紹介から始めよつか。」

なんとか女声で言い切る。

「木々乃遊子。元気な女子高生です！」

…メツチャ恥ずかしい（泣）

「私は久原仁美^{ひとみ}。庶民に憧れるお嬢様です。」

…これよりマシか。男が自分をお嬢様って…ウケる（笑）

「けい んでいうとム みたいな？ボソッ（クロスぞ遊子）」

「自重しなさい！あとボソッと物騒な事言わないで！」

「2人とも様になつとるな。ウチは元気な小学生の男の子や。」

凜太郎

「あんたほどじゃ無いわよ！」

「いやほんまに。洒落にならんほど似合つとるから。」

「コクコクッ」

輝が目輝かしているが喜べない。

「仁美、話題無い？」

「…私は世間知らずだから。」

設定を上手く利用して逃げやがった！

「なあなあ遊子姉ちゃん。」

1番めんどくさいのが声を掛けてきた。

「チッ、なあに？凜太郎君？」

「今舌打ちせえへんかった？」
耳の良い奴だ。

「してないよ。それより何？」
「オタクって何？」

早速答えにくい質問がきた。

「中学生になってからね。」

「萌えとは？」

小学生…なんだよな？

「ググりなさい！」

「最後に、遊子（笑）にとってギャルゲとは？」

想像しうる中で最低の質問キターー！！

「心のオアシス…じゃなくて、（笑）を敬称のように使っちゃダメ！」

反射的に正直に答えてしまった。

「……アナタ最悪ね。」

凜太郎の毒舌の矛先が仁美に向く。

「仁美姉ちゃ…ごめんなさい。」

「理由無く謝るのやめてくれる！？」

「ごめんなさい（泣）」

「…仁美。アナタ最悪ね」

「子供にエロゲについての考えを述べたヒトに言われたく無いわよ！」

カーンッ

「ここで試合終了の合図や」

「切り替え早っ！！」

「輝さん、結果は？」

緊張の瞬間、仁も祈っている。

「全員、アウト」

「ガ 使だっ！」

結局、今日は駄弁って終わり、ルファング井はお預けとなった。

第二章 (3) 早起 女装？（後書き）

勢いでボツ話を投稿してしまったカルタです。

今回は、女装男装です。挿絵がなくて申し訳ないです。いつか自分で描こうと思っています！

第二章 (4) 物語はこれから……(前書き)

久しぶりの前書きです。

前回の回想での悩みを解決しないで、もう次の回想です。
至らぬ点も多いと思いますが、最後までお楽しみ下さい！

第二章 (4) 物語はこれから……

日はすっかり暮れていた。

暗いテントの中で凧はテントで考え事をしていた。

『凧って輝にしかメイクしないよね、なんで？』

今日ユウに言われた言葉だ。

特に理由は無いと言ったが、輝にしかメイクしなかったのは、輝の照れ屋な性格が似ていたからだ……あの子に……

虹テントから寝息が聞こえ始めた。

……物心ついた頃にはもう親は居なかった。

ここはそういう子供達が集まる所、孤児院だ。この孤児院はA棟、C棟まであり、凧はA棟にいた。名字が無かった凧は、関西弁を喋ったので、大阪の地名の難波と呼ばれていた。

この頃の凧も今と変わらず元気な子だった。ある日、A棟で遊び飽きた凧は、退屈しのぎにC棟に行った。

C棟には見たことの無い子供達が沢山いた。

子供達が元気に遊ぶ中で、部屋の角にじっとしている女の子がいた。凧は彼女に少し興味が出てきて、話し掛けた。

……頬を赤らめただけで、無反応。

気になった凧が先生に聞くと、彼女が極度の照れ屋だということがわかった。

話す 無反応 話す 無反応……

これを繰り返していた。

自分に自信が無いなら、自分を隠せば良い。そう思った凧は先生からメイク道具をパクリ、持っていた。

そして、先生の見よう見まねで彼女にメイクを施した。すると、

「いつも……ありがとう……」

うつむいたままでそう言ってくれた。

それが嬉しくて、メイクの勉強をした（先生を盗み見ていた）。

彼女とはどんな仲良くなっていたが、名前は聞かなかった。
名前が無い子も珍しくないからだ。

初めて会った日から3週間…

前触れもなく孤児院が潰れた。理由は未だよくわからない。

孤児達は離れ離れになった。凜は彼女を探したが、もうC棟ころか孤児院に彼女の姿は無かった。

凜が小学3年生の時の出来事だった…

優しい河川敷のおっちゃん達、つまりホームレスに世話してもらい、13歳になった。

反抗期が訪れ、凜はおっちゃんAとGの元を去り、この森にたどり着いた。

おっちゃん達が、自分のテントの布を交互に縫って作ってくれた七色のテントを張り、自給自足の生活を始めた。

これが、全ての始まりである。

テルが来たのはその半年後。最初は彼女かと思ったが、声優という夢で違ったと思った。

仲間が増えるのは、まだ先の話だ…

第二章 (4) 物語はこれから……(後書き)

さすがに回想多いなあ、とか思ってるカルタです。

一話おきに回想してます。でも懲りない。それがカルタクオリティ

ー！

いつもよりテンションの高いあとがきでしたー！！

小雨が霧のように降っていた。

今日は雨天活動中止…にはならなかった。

緑テントの中、全員集合している。そして皆テントの真ん中辺りに注目している。視線の先には…第二の迷い人(女)。

何故こんな状況になったかという、時は3時間前、午前8時にさかのぼる…

今日は雨。さすがに奴等も大人しく…

「たのもーっ!」「ペコリッ」

ならなかった。逆に元気がいつもの3割増だ。

寝起きの頭じゃ

ついていけない。

輝のメイクを進めながら凜が叫ぶ。

「駄弁るぞー!」

「おー!」「」

「…おー」

やつと頭が回り始めた。【w i d o w sの起動音】

「今日の輝の設定は?」

先日のハンターモードが脳裏に浮かんだ。

「安心せえ。普通の女子高生や。」

「今日は大丈夫だよ!この前はゴメンね。遊、仁。」

「よっしゃあ!駄弁るぜ!」

「仁、いきなりどうした!?」

出会った頃の、のんびりとした彼はもういない。確かに今の輝は可愛いが…

「よっしゃあ!俺も駄弁るぜ!」

…元気に言ってみたが、内容は不健康極まりない。

「おいそこのアホ共。少しは落ち着かんかい(怒)」

「すいませんでした!」「」

凄い剣幕だった。関西弁で怖さプラス！

「そうだよ、特に仁。今日は唯一特技を見せてない仁の絵を見せる為に集まったんだよ？」

「仁の絵？」

「そういえば絵師志望だったけ。」

「そうだよー。見たい？」

「いや、別に」

「そんなに即答しなくても！」

「『見たい？』なんて聞いた仁が悪い。そんなん特に見たくもないに決まっとるやん。」

「私も今のは仁が悪いと思う。」

「最近、僕アウェイ過ぎない!？」

「「だって、仁だもん」「」

「う、うわあああつ（泣）」

さすがに可哀想になってきた。

「仁、早く絵見せろ。」

「あれだけイジツといて!？何、ホントは見たいの？」

「いや、同情しただけ」

「もう、それでいいや…」

そして5分後…

「チツ、うまい…!!」

大雑把な筆使いだが、ポイントはしっかりおさえてる。

「オタクに誉められるのは嬉しいなー。」

グサツ【効果は抜群だーっ!】

改めて人にオタクと呼ばれると傷つく。仕返しのもりだろうか？

「確かにうまいですね。でも服のシワが多すぎるかな？ココとココは省いた方が良さと思うよ。」

言われてみれば確かに……ってあれ？今の声、誰のだ？

皆一斉に後ろを向く。そこにいたのは…女の子？

短めの茶髪、死んでいる目。オーラでわかるが、俺と同種族だ！

「ん？どうしたの皆して私を見て。見とれた？」

うつわぁ、ウゼエ。

「誰やねんアンタ？」

凜は全く動じてない。

「私？私は尾西実夏。おにしみか知らないとは言わせないよ、その君！」

ビシッと俺を指差す実夏。

「俺っすか？」

知り合いにこんな奴いたかな？ん、でもなんか見覚えが……

「…全員初対面だな！」

…コイツのウザさ、計り知れねえ。

「ミカ。家、親は？」

凜が聞く。この質問はまさか…スカ トアタック！

「家には帰りたくない！あとご飯をください。」

…『無い』じゃなくて『帰りたくない』か。凜はどうするんだろ
う？

「飯と TENT をやるから一緒に暮らせへん？」

特に変わらなかった。

「お前のスカウト基準は親と家の有無だけか！？」

「来る者拒まず、出ていく者は…それがウチの、忍道や！」

「ナ ト！？あと出ていく者は何！？」

「早、く…ご飯…」

バタリッ

実夏は予想以上に弱ってたらしく、力尽きた。

そして、今に至る…

「カツ丼！」

見事にメニューを当てながら起きた。

凜はカツ丼を差し出しながら自己紹介する。

「おはようさん。ウチは難波凜。夢はメイクアップアーティスト
や！よろしく！」

「ぼくは久原仁。夢は絵師。よろしくー。」

「私は黄田輝。夢は声優。着替えてメイクすると性格が変わる照れ屋さんです。」

「俺は木々乃遊。夢なし。オタク。」

俺だけ夢無し！…惨めだ（泣）

「…ゴックン。名は名乗った。特徴、木々乃に同じ。」

これは…自己紹介と呼べるのか？

「これからよろしく。特に遊！」

「ん？ああ、オタク同士仲良く…」

「アンタには、負けない！！」

「えっ、俺、敵扱い？」

「他の皆は仲良くしよう！」

「…イエー！！」

なんだ、この疎外感？

空を仰ぐ。涙がこぼれないように…

こうして、またここに住人^{へんじん}が増えた。

第三章

(1)

新入り 憂鬱(後書き)

どうもカルタです。

なんと、ここにきて新キャラ登場です。

実夏がどんな過去を抱えているのか、お楽しみに!!

と、自分でハードル上げといて、勝手に萎えてるカルタでした。

第三章 (2) 待ち望んだ再会

今は午後3時。

カツ丼を食べ終えた実夏は「眠い」と言い残し、気を失っている間に用意されていたテントに入った。

「そうだ、後で家に連絡しとかなきゃ。」

気を紛らわせるためにそう呟いてみた。

胸の鼓動がいつもより早い。まさか、あの人がこんな所にいるなんて…

名乗っても気付かなかったことにイラッとしたが、同時に恥ずかしくなつて誤魔化してしまった。

5年前、私は遊が隣にいる。ただそれだけで幸せだった。遊に密かな恋心を抱いていた。

しかしあの事故の時、私はショックで、1番辛かったはずの遊に何もしてあげられなかった。

1番近くに居たのは私なのに…

ずっとずっと、好きだったはずなのに…

今更、遊に会わず顔など無い。今も後悔している。

遊が引き込もってから、頻繁に遊の親戚に様子を聞いた。いつ学校に来て話が出るように。せめてもの償いだった…

…まあ、そのせいで私もオタクになった訳だけだね。

結局、高校生になつても遊は学校に来なかった。

最近受験で忙しく、遊の様子を聞いていなかった。

なので今日の朝、1ヶ月ぶりに遊の家を訪れた。何故か差し押さえられていたけど…

きつと近くにいるはず！そう思って、雨の中で近所を探し回った。商店街、駅前、学校。探しても見付からない。最後に公園に行った。

でも、やはり居ない。

時刻は8時半。かれこれ1時間以上探している。

1度家に帰ろうと思い、ベンチから立ち上がると…

「…イジ…」

「イヤ…」

森の中から何か聞こえた気がした。

その声の方向に走ってみる。うつそうとした森の中、木を避けながら走り続ける。

突如視界が開けた。そこにあつたのは…

1・青テント

2・赤テント

3・緑テント

4・虹テント

…ツツコミたい気持ちでいっぱいだ。虹テントなんて初めて見た。だが、そんな気持ちは緑テントから聞こえる声にかき消された。

何人かの笑い声が緑テントから聞こえてきた。

覗いてみると…遊らしき人がいた。まだ面影は残っている。

やはり目の前にいるとなると緊張する。胸が高鳴る。

私の初恋の続きが始まった。

こっそりテントに入り、今に至る…

第三章 (2) 待ち望んだ再会(後書き)

毎度ながらカルタです。

そして、毎度ながら回想です。

文章力の無さを痛感しながらも、なんとか半分投稿し終わりました。ここまで読んで下さった方に感謝を。そして、これからも宜しくお願いします！

第四章 (1) 失踪 旅立ち

昨日の雨のせいでぬかるんだ地…

「ユウ！緊急事態や！」

天気の詳細すらさせてくれなかった。

入ってきた凜の方を見ると、輝、実夏、……あれ？仁がいない。

「仁が出ていつてもた！」

なん…だと…！？

で、でも！出ていく理由に心当たりなんて俺には無…

「これで3回目や」

コイツらにはありそうだ。

「何で仁が出ていったかわからないんだが…」

凜は目を背け、深刻そうに言った。

「……地味やねん」

「は？」

「絵なんていう滅多に使わん特技やから、目立てへんねん！」

「それだけで！？それに仁が目立たないなんて、そんな…」

「確かに。新入りの私よりキャラ薄いです。」

…ゴメン、仁。否定する言葉が思い付かないよ。

「というわけで、今日の活動は仁の搜索及び励ましや！テル、今

日の設定は『探偵』な」

「コクコクッ」

力強く頷く姿はとても可愛かった。

10分後…

「私は高校生探偵・黄田輝。幼なじみのも（ry」

変な人が出てきた。いや元々変だが…

設定、『ナン君』の間違いでは？

「ウチは、なにわの高校生探偵・難波凜。テルの戦友や！」
ライバル

…黙れ江戸っ子。

「そして私は尾西博士だ！」

くそつ、俺一人じゃ捌ききれねえ！

「…仁よ。私達からは逃げられないぜ！」

ここまで俺がまともに見える状況も珍しい。敢えて思いつきスルーして訪ねる。

「で、どうやって探すんだ？」

「手分けして適当に探せ！どうせその辺におる筈や！」

「仁の扱い酷すぎるだろ！」

仁が出て行くのもわかる気がする。

…それから地道な搜索を進めるが見つかる訳もなく、いつの間にか日が暮れて、全員テントに戻って来ていた。

「畜生！仁の奴、どこにおんねん！前はすぐ見つかったのに…」

ふざけていても、何だかんだ仲間思いの凜は本気で心配している。

「この前みたいに、その辺に転がったたら即回収できるんやけど…」

仲間思い…なんだよな？

「もしかしたら、地味とは別の理由なのかも。」

……！？素の輝が珍しくはつきり喋った！

「だつたら何で…」

凜が言いかけたところで、

「ただいまー…」

なんと、探しても見つからなかった仁が帰って来た！

「仁！心配したんやで！どこ行って…」

「ゴメン。大事な…用が、あったから。」

歯切れが悪い。どうしたのだろう？

「…大事な用？」

「実は……夢が叶った。」

「……っ」「……」

唐突にそう告げられ、皆言葉を失う。

「実は、電 イラスト大賞に絵を送ってたんだ。そしたら受賞して、新人作家が気に入ってくれて……」

「でも、まだここで一緒に……」

「無理なんだ。その人の職場なんだけど、かなり遠くて……ここからじゃ通えない。」

「そんな……」「グスッ」

凜と輝は今にも泣きそうだ。

「「発売したら教える。金稼いでも買ってやる。」」

実夏とハモったが気にしない。

「ありがとう遊、実夏。名残惜しくなる前に行くね。皆、元気で……」

「ちよつと待て、仁。1つだけ答えて行き。」

凜が震えた声で仁を呼び止める。

「……………」

「兄貴は、見つかったんか？」

「……うん。」

「……ならよし。言うことはあらへん。」

「今までありがとう、凜。世話になった。じゃあね……」

そう言い残して行ってしまった。

その背中には俺には眩しすぎて……ただ、呆然と見送ることしか出来なかった。

第四章 (1) 失踪 旅立ち(後書き)

というわけで第四章です！

仁君が行ってしまいました。これをきっかけに、皆自分の過去と向かい合っていきます。

次回、お楽しみに～！！

第四章 (2) 柵との別れ(前書き)

さあ、物語もクライマックス間近！
サブタイトルの「柵」ですが「しがらみ」と読みます。頭の悪い力
ルタさんは読めなかったので。

第四章 (2) 柵との別れ

その日は、その場で解散となった。

緑テントの中、遊は仁の後ろ姿を思い出していた。

「夢、か…」

夢

未だ、心に鍵をかけている遊には眩し過ぎるものだった。

そう…今まで本当に心を開いた人は3人

両親と、あとは…

「入るよ」

実夏だった。

寂しそうな顔をしている。

「何考えてたの？」

「仁について…」

「ふーん。本当に、それだけ？」

俺の心を覗いたかのような質問に、ドキツとした。

実夏はまっすぐ俺の目を見ている。

誤魔化せそうにない。正直に言うことにした。

「…なあ、実夏。夢って、何なんだろうな？」

「夢？」

「そう、夢…」

「………」

「俺は昔、両親を俺と友達目の前で亡くした。」

「………」

「友達にショックを与えた責任。親を助けられなかった責任。その責任に押し潰されそうで、心を閉ざし、逃げ続けた。」

「…うん」

「そんな俺が、夢を追っていいのかな？逃げながらも、夢を追っていいのかな？」

「駄目でしょ。」

即答された。でも当たり前前の答え…

「だから…逃げないで。」

「えっ…」

予想外の言葉に戸惑った。

「私の昔話も聞いてくれる？」

「……」

「昔、友達の親が目の前で事故死したの。どしゃ降りの日だった…」

「おい、まさか…」

「シヨックだったわ。でも1番の友達が苦しんでる時、何もできなかった…」

「……」

「ゴメン。私も、責任を感じてたの。」

「実夏だったのか…」

すっかり忘れてた。

「俺の方こそ、ゴメン。あの日、一緒に帰らなければ…」

バチンッ

「あだっ！」

デコピン（威力大）が俺のデコに炸裂する。

「お互い責任感じてんだから、おあいこでしょ？」

「あ、ああ…」

「それに、私はあの時遊と帰れて嬉しかった。だから謝らないで！」

「そうか…」

どうしよう。顔がめっちゃ熱い！

「あつ、それともう1つ…」

赤面しながら実夏が言った。

「もう少しマトモな趣味を持って〜っつ〜!!」

…訂正、実夏が叫んだ。

「お前もオタクだろ!」

「うるさいうるさいうるさ〜い! アンタが学校来ても喋れるように趣味を合わせてたらこうなったの!」

「っつ〜!!」

再び顔が熱くなる。

「親とか友達とかに変な目で見られたんだんだからね!？」

「実夏、お前…」

「なっ、何よ？」

「ストーリー？」

引きこもっていた俺の趣味を知っているなんて…

ブチッ

「心配して、アンタの親戚に聞いてたのよ。それをなに、ストーリー呼ばわり？」

「ちよっ、実夏？何で拳を固めてるんだ？オイ待て早まるな!」

「悪質な変態と一緒にしないでよっ!」

「ぐはっ!」

…意外と強かった

それから休憩を挟み、午後11時頃…

「話を戻そっか」

体温が一気に下がる。

「夢、追ってもいいんだよ？」

考える。今自分はどうしたいのかを。

俺が出した結論は…

「…俺なんかより、アイツらが先だろ？」

赤テント、虹テントの方を見る。

「…そうね。一緒に背中を押してあげましょう!」

「おう！」

いつの間にか、俺の心を閉ざしていた鍵は崩れ落ちていた。

第四章 (2) 柵との別れ(後書き)

あとがきで書くこと無くて困ってるカルタです。

「遊君、仲良かった女の子の名前くらい覚えとけよ。というかニートニート言ってる割には何気リア充じゃねえか！」

と、キャラに嫉妬しつつ、あとがき終わります!!

第四章 (3) 再会は突然に……

次の日は夏と間違うほど暑かった…

午前9時半、テント近くの木陰で皆が集まっていた。というか俺達が凧と輝を呼び出していた。もちろん仁の姿は無い。

「何の用や、ユウ、ミカ？」

「お前らは、仁を見てどう思った？」

俺と実夏は、昨日の話を行動に移そうとしていた。

「羨ましかった。夢が叶うなんて…」

「そうじゃない。質問が悪かった。言い直す。」

「…?」「…?」

凧と輝が首をかしげている。

「お前らは仁を見て、これからどうしようと思った？」

「これからも頑張ろうと…」

「これまで頑張っていたのか？」

「当たり前やろ!」「コクコクッ!」

「本当に?」

「…どういう意味や?」

かなり怒ってるようだ。声にドスが利いている。

「サボってたんじゃないかねえかって意味だ。居心地の良いここに居るために。」

「そんなことっ…」

「無かったのか?」

「……」

流石の凧も黙る。

ここに居る人に言っではいけない言葉。それを、俺は迷いなく言い放った。

まあ、二ートの俺が言えた事じゃないんだが…

「責めるつもりはないの。私達にその資格はないし。」

全くもってその通りだ。

「私達は2人にも夢を叶えて欲しいだけ。」

「俺達にできる事があれば言って欲しい。協力は惜しまん。」

「なんでいきなり…」

「約束したからな…」

コイツらとの出会いを思い出しながら、凜に言う。

「飯とテントはもらった。だからお前らが暇じゃなくなるように、夢を叶える手伝いをしてやる！」

「……………っ！！ユウ、よく覚えてたな？」

「いや覚えてるよ。1週間くらいしか経ってないもん。」

「アンタが1週間前の事を覚えてるなんて…」

「そこまで馬鹿じゃねえよ！！」

「「えっ、マジで？」」

「オイ、凜はともかく何故に実夏までも…。なあ輝？」

「……………プイッ」

「目をそらすなーっ！」

皆からの評価は『俺』馬鹿』のようだ。

……………話がそれすぎたな。

「話を戻そう。」

「「あつ逃げた。」」

「お前らうるせえよ！！今は本題それじゃねえだろ！！」

「「…はあ」」

気にしないことにする。

「出来ることって言っても大した事できないから…」

「所詮ユウやしな。生きるのに精一杯やろ。」

否定はできない

「何でそれが夢になったかを聞かせてくれないか？」

「孤児院におった女の子にようメイクしとったから、以上終わり。」

「はやっ！！」

もう少し話すの渋ると思ったから拍子抜けした。

「輝にも今初めて喋った。」

「その割にはあつさりと喋ったな！」

「……凜、孤児院の名前は？」

輝が話に入ってきた。顔付きは真剣だ。

「確か数年前に潰れた……」

…ゴクリ

「マ ラタウンやったかな？」

「それは絶対違うと思う……！」

相変わらずのポケ ン好き。実夏も同時にツツコンでいた。

「やっぱり凜はあの時の……」

「「通じたっ……！」」

輝がハキハキ喋っているが、今はそれよりマサ タウンだ。

「どういう意味や、テル？」

「榎本孤児院、通称 サラタウン。ポケモ 好きで、フ 老人を
名乗る榎本さんが院長。」

色々と残念な人だ。

「いや、詳しい事は覚えてへんねん。」

「A棟〜C棟まであつて私はC棟にいた。覚えてるよね、A棟の
メイクさん？」

「じゃあテルがあの時の……」

「うん」

「何で声優を目指そうって思ったん？」

「面と向かつて話すの苦手だから……。アニメを通してでも私の声
を届けたかったの。凜は？」

「ウチは、メイクしとつたら何時かアンタに会えると思ってな。も
っと一緒に楽しく過ごす。それがウチのホントの夢や。」

「楽しく過ごすって、何か小学生の頃の俺みたぐはっ！」

「過去についてのモヤモヤが、一気にのうなったわ。」

「私も」

「輝、ウチを役作りのための専属のメイクさんとして雇ってくれ。
一緒に頑張ろう！」

「うんっ！」

その後また二人、ここを去っていった。

残るはあと二人。しかし、彼らの進む道はもう決まっていた。

第四章 (3) 再会は突然に……(後書き)

カルタです。

とうとう森からホームレス達がいなくなりました。

遊と実夏が進む道とは……！？

次回、最終話です。お楽しみに～！！

エピソード

旅立ちの先に……（前書き）

遂にエピソードです！

ありきたりな終わり方な気もしますが、楽しんで頂けたら幸いです。

エピローグ 旅立ちの先に……

あの森から、ホームレス達が出ていってから10年もの月日が流れた。

あの後、俺と実夏は某アニメーション学院に入学。今はアニメ製作会社に勤めている。

二人で一人前扱い。そして、初めて監督を任された。普通ならあり得ないが、クビをかけて頼み込んだ。

「遊うゝ、大丈夫？ここクビになつたら行くとこないよ？」

「こんなチャンスは滅多にないんだ。やるしかないだろ？」

「確かにね。」

実夏は苦笑混じりに答える。

「原作の絵師にアニメの方も頼んで、断られ続けて……その絵師が仁なんてね。」

「声優も、付き人の気分で性格が変わって面倒くさいからって、何人か交渉を諦めた……輝と凜。」

「……はああゝゝ」

二人して大きな溜息をつき、

「「あいつら大人になっても迷惑だな!!」」

仲良くハモる俺達。だが、溜息と同時に笑みがこぼれる。

「実夏、まだアイツらの耐性ついてるか？」

「そう簡単には消えないわよ。」

「よし！それじゃあ……ひと仕事してくるか！」

「うん！」

ホームレス達の物語は終わったが、俺達の物語はまだまだ続く。

エピローグ

旅立ちの先に……（後書き）

結局は、夢を叶えてからも楽しく過ごしていく遊達なものでした！
いかがでしたか？意見、感想を頂けたら幸いです。

ここまでお付き合い頂いた皆様に心からの感謝を！！

以上カルタでした〜っ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6241m/>

ホームレス達のいるところっ!!

2011年5月18日09時30分発行